瀬田の丘

創刊 1973 年
編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

今日のみことば
復活の主日Ａ年（２０２６年５月３１日）

主任司祭　小西広志神父

第一朗読：出エジプト記３４章４ｂ－６、８－９節
第二朗読：コリントの信徒への手紙２　１３章１１－１３節
福音朗読：ヨハネによる福音書3章16－18節

今日の福音朗読はニコデモとの対話の箇所です。直前に「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければならない。それは、信じる者がみな、人の子によって永遠の命を得るためである」（14-15節　フランシスコ会訳）とあります。それを受けて今日の朗読箇所があります。

「モーセが荒れ野で蛇を上げた」のは、イスラエルの民がエジプトから救い出された後、40年間荒野を旅した物語の中に出てくる出来事（民数記21章4-9節）でした。
14節と15節は「人の子」であるイエスさまの側から見た救いのためのわざとその目的を表しています。それに対して16節からは神（御父）の側から見た救いのためのわざとその目的が表現されます。

三つの朗読のあじわい
第一朗読：神はご自分のことをあからさまに教えてくれる
神ご自身が「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ちた者」であると自分のことをあからさまにしてくました。これを神の啓示と呼びます。神は把握しきれない神秘ではなく、人間に自分のことを自己開示してくれる、そんな神なのです。

第二朗読：次第次第にわかってくる神の姿
神は、人間の能力、程度に合わせ次第次第にご自分のことを明らかにしてくださいます。つまり、いっぺんには自己開示しないのです。その意味では神は神秘と言えるでしょう。第二朗読では、愛の神、平和の神、共にいる神、交わりの神といった具合に分かってきました。このように分かるようになったきっかけは、主イエス・キリストの受難・死・復活の出来事です。

福音朗読：送り出す側と送り出される側
世を救うために送り出されたという自覚がイエスさまのこころにはあったのでしょう。イエ

さまは、この世に送り出されても父なる神との交わり は失われません。むしろ、送り出されたからこそ、交わりは深まっていきます。

今日の三つの朗読をわたしたちの人生に照らして考えてみましょう。

第一朗読と第二朗読に従えば、神さまがどんな方であるかは、少しずつ人生の中で明らかになっていきます。だから、「わたしは神さまを知ってます」とは言い切れないでしょう。いつも 胸をたたいて、「神さま、あなたのことを教えてください」と謙虚に願わなければならないです。
しかし、第二朗読にあるように神さまは交わり（コイノーニアー）の神さまです。神さまのいのちの内側で父と子と聖霊の愛の交わりがあるからです。その交わりはいのちの外側へ、つまり、わたしたちの日常へとあふれ出ます。交わりの神さまは、わたしたち一人ひとりと交わりたいと思っておられるのです。

福音朗読から見えてくるのは父なる神さまと、独り子であるイエスさまとの関係です。送り出す、送り出される関係は、信頼と理解がなければ成り立ちません。わたしたちは人生のいろいろな場面で送り出し、送り出されてきました。どんな気持ちだったのでしょうか。父なる神さまが独り子を送り出す、派遣するときの気持ちを少しでも察することができるでしょう。

お知らせ
教会のホームページを再開しました。
https://www.seta-catholic-church.com/です。